様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：２１２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５５１０００５

研究課題名（和文）被災地の保育者研修ニーズに応じた園内研修の開発及び評価法の検討

研究課題名（英文）Considering the Development and Evaluation Methods of In-house Training Suited to the Training Needs of Child Care Workers in the Disaster Areas

研究代表者
井上　孝之（INOUE, Takayuki）

岩手県立大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：４０３８１３１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：東日本大震災の被災地（岩手県沿岸部、福島県中通り）における保育者の支援を目的とし、研修ニーズに応じた園内研修の開発及び評価を検討した。地震と津波・火災により町全体が壊滅した地域と、放射線被害により建物の被害は少なくとも戸外活動が制限された地域では、復興の様子は全く異なっていた。当時は全ての保育施設が甚大な課題を抱えていた。しかし、地域の状況の変化に合わせた保育者の援助の工夫には共通点も多く見出されており、本研究の成果は関連学会やシンポジウム等で周知した。

研究成果の概要（英文）：With the objective of supporting child care workers in the Great East Japan Earthquake disaster areas (the coastal regions of Iwate Prefecture and the Nakadori region of Fukushima Prefecture), we considered the development and evaluation of in-house training programs suited to training needs. The situation regarding recovery and reconstruction was completely different between areas where entire municipalities were destroyed by the earthquake, tsunami, and fires, and areas where there was little damage to buildings but outdoor activities were restricted due to radiation damage. At that time, all child care facilities faced enormous challenges. However, many common points have been identified concerning special measures to assist child care workers adapted to the changes in each region's situation. Thus, information regarding the results of this research has been provided at related academic conferences and symposiums.

研究分野：保育学、幼児教育学

キーワード：園内研修　研修ニーズ　対話　被災地　ケア　メンタルヘルス　レジリエンス

１．研究開始当初の背景

(1)東日本大震災の被災地の状況：被災地は発災から1年半以上経過しているものの非常事態である.被災地の復旧復興もさるもの,人々の心のケアが大きな課題であった.応募者らは,被災地の臨床発達心理士・学校心理士として,保護者や教職員向けの心のケアの研修会を開催する一方で,レクリエーション・インストラクターとして子どもたちを内陸部の安全な場所に招き遊び場の提供を行ってきた.災害時の「Psychological First Aid」(以下,PFA)を元にした心のケアや,子どもの遊び支援は,ボランティア等の努力の結果一応の成果は上がっている.また,学齢児への学習支援は全国のNPO団体や社会起業家らが資金を調達し積極的に行われている.しかし,最近はボランティアの数も少なくなっており,まだまだ十分とは言えない状態であった.

(2)乳幼児施設の状況：保育所や幼稚園(以下,保育施設)の保育士や幼稚園教諭(以下,保育者)も同様で,被災して仮設住宅で生活しながら,仮設の保育施設で働く保育者(岩手県大槌町)も少なくない.現在の保育者には,保護者への子育て支援も求められており,被災地の劣悪な保育環境下で子どもの最善の利益のために,日々奔走しているのが実態である.また,福島県郡山市では,放射能の影響により,戸外での遊び時間も制限され,室内に外気を取り込むことすら困難になっている.日本保育学会のシンポジウムによれば,こうした環境下では保育者のストレスが高いものの,同時に効力感や充実感も高いことが話題となっていた.

２．研究の目的

東日本大震災の被災地域においては疲弊した保育者への支援が喫緊の課題である.そこで本研究では,対話の手法であるホールシステム・アプローチを通して,「被災地の保育者研修ニーズに応じた園内研修の開発と評価法の検証」を行うことを目的とする.被災地で働く保育者の震災ストレスやメンタルヘルスケア,放射能災害下での室内遊びの開発, 保護者への保育指導等,保育者のケアや専門性の向上にかかる課題(研修ニーズ)を,園内研修 によって改善し,持続的に発展可能な研修体制のプログラムを開発し,実践を通して検討する.

３．研究の方法

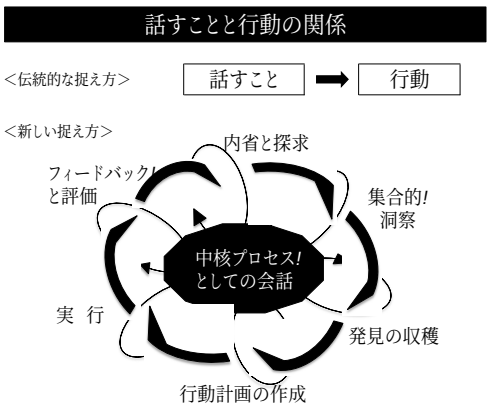
本研究では,この既存の「ホールシステム・アプローチ」をベースとした研修方法と評価法の検討を行う.これにより,ファシリテーターの力量に左右されることの少ない,保育者の自己研鑽のため研修体制が行われ,持続的に発展可能なものとなるようなシステム作りを目指している. 園内研修においては,PFA を中心に据えたメンタルヘルスケアを行い,「ワールド・カフェ」の手法を中心に様々な手法を融合させる.「対話」を通して,内省・洞察・収穫・行動計画・実行・フィードバックし,集合的な知識の共有や,個人的な関係のネットワーク,新しい行動の可能性を生み出すことのできる研修方法を開発する.

今後さらに進行する少子社会により,保育施設の統廃合や株式会社の参入も進む.幼保一体化が進むにつれ,保育施設の持つ独特の保育文化の違いや,採用形態による保育者間の軋轢は,保育者同士のコミュニケーション不全として大きな課題である.保育者の保育力の向上を図るためには,設置者による園内研修は不可欠であり,応募者らが開発している「ホールシステム・ アプローチ」を導入した研修方法は非常に効果的で,保育者のメンタルヘルスケアや保育者間の コミュニケーションの改善にも有効に働くと予測される.アメリカの新しい会議技法を,被災地域の保育者研修に導入することによる効果は極めて大きい.これらの研修方法が開発されれば,保育者の自己研鑽のために,持続的に発展可能な研修体制が構築されると考える.

４．研究成果

本研究では被災した保育者の支援のために,「対話」を中心に据えた「ホールシステム・アプローチ」を通して,震災ストレスやメンタルヘルスケア,放射線下での室内遊びの開発,保護者への子育て支援等を保育者のケアや専門性の向上にかかる課題（研修ニーズ）として把握し,それらの園内研修による改善を試みた.

(1)「ホールシステム・アプローチ」を保育者研修に適用する際の問題点析出と論点整理「対話」を重視し,岩手県沿岸部,福島県中通りの保育施設でのインタビュー調査をもとに,疲弊した保育者に対する「ホールシステム・アプローチ」の可能性について検討した. この段階で会話や対話の持つ特性を明らかにし,保育者への特有の研修技法の開発に向けた論点を明らかになった.



アニータ･ブラウン, デイビッド･アイザックス「ワールド･カフェ」 ヒューマンバリュー2007 より

(2)復旧に伴う課題への対処当初の震災への対応から,新しいフェーズへ移行すると新たな課題が生じることは共通している.岩手県沿岸部の保育施設は高台の仮園舎で保育を進めている時には,自由に保育活動を行うことができたものの,平地の新築園舎に移転したことで,子どもを守ることへの責任を負担に思う職員の心理的ストレスが過重になり,メンタルヘルスケアが必要となった.同様に,福島県中通りでは,高放射線量により戸外での活動が制限されていたが,制限が解除されても若手の保育者は園庭での指導経験がなかったため,戸外遊びの研修が必要となった.これらは,対象としている2地域で全く異なる状況であっても,フェーズが変わるごとに新たな課題に直面する点では同様に推移していると言えよう.

表　保育施設の復旧への推移

フェーズ		岩手県沿岸部	福島県中通り
1	震災被害の様子	･建物･街の壊滅的な被害 ･園舎の被害	･建物の被害は少ない ･日常的な放射線の恐怖
2	復興への努力	･仮園舎での保育 ･仮設住宅での生活	･戸外活動の制限 ･屋内保育の工夫
3	状況の好転	･新園舎への移転 ･新たな職員採用	･戸外活動の制限解除 ･新たな職員採用
4	新たな課題	･新旧職員のコミュニケーション ･園の存続問題 ･「命を預かる仕事」を再認識	･子どもと保育者の経験不足 ･子どもの世話をしない保護者 ･「命を預かる仕事」を再認識

(3)平成 27 年度は,岩手県と要請があった秋田県での研究成果の報告とシンポジウムを実施した.当初予定していた福島県中通りでの開催は登壇予定の関係者らの辞退により中止した.しかし,2地域において実施した復興に向けた保育の取り組みや園内研修のあり方は参加した保育者の学びの場となった.

(4)平成 28 年度は,福島県中通りの保育施設においてインタビュー調査を実施した.放射線科も下がり,福島市は震災後の出産ラッシュで待機児童も増えていた.震災当初は入園希望者の激減で充足率が 50%台だったが,この 1 年だけで子どもの数が増え現在は充足率 100%を超えている.保育者らも,外遊びの研修を行い,保育力向上に向けて対話を通した研修も継続されている.入園希望者が多いため,平成 29 年度には入園待ち状態である.

(5)ホールシステム・アプローチを導入した二つの地域では,一定の成果があったと考えられる.しかし,福島県では,研究成果のシンポジウムを開催することができなかった.また,岩手県や秋田県で開催したシンポジウムにも,福島の幼稚園園長は出席することができなかった.当時の園長の思いは,「福島の放射線問題は福島の問題であって,わざわざ他の地域まで行って,その状況を語る必要ない」と考えていたようである.
福島の園長の思いは,かなり複雑であり,常に前向きではあるものの,揺れ動いている様子が伺われた.
　その後福島から避難した地域で子どもたちがいじめられるという「原発避難いじめ」が報じられた.それは大人社会でも起きているという.
　現在,幼稚園や保育所に通う子どもたちは震災後に生まれた子どもたちである.当時の園児は全て卒園し,小学生になっている.アレクシェービッチによれば,チェルノブイリの原発事故では,事故後に生まれた子どもが,原発の廃炉ごっこに興じていた例もあるという.福島の本当の意味での復旧,復興はいつになるのかわからないが,保育者の資質向上のためにも,ホールシステム・アプローチを活用した保育者のニーズに合わせた研修は今後も被災地の復旧へのフェーズに合わせて行なっていく必要があろう.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

1 三浦主博,音山若穂,井上孝之,利根川智子,対話型アプローチによる実習事後指導の試み.東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部紀要,査読有,46,2015,91-97.

2 上村裕樹,音山若穂,井上孝之,三浦主博,和田明人,織田栄子,京免徹雄,利根川智子,教育・保育における対話型アプローチの取組み.帯広大谷短期大学紀要,査読無, 52,2015,19-29.

3 三浦主博, 音山若穂,井上孝之,対話型アプローチによる学生参加型地域交流事業の実践.東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部紀要,査読無,45,2014,91-97.

〔学会発表〕（計 20 件）

1 井上孝之,会頭講演-保育保健をつなぐ-.第

22回日本保育保健学会,2016.10.15.岩手県立大学（岩手県）

2 井上孝之（企画）,音山若穂,畑山みさ子,八木淳子,保育施設における心のケア-震災からこれまで,そして明日へ-.第22回日本保育保健学会,2016.10.15.岩手県立大学（岩手県）

3 音山若穂,三浦主博,織田栄子,井上孝之,対話型アプローチを取り入れた演習プログラムの一試案(２),日本保育学会,2016.5.7東京学芸大学（東京都）

4 井上孝之,保育実践の可視化とその質の向上,環太平洋乳幼児教育学会（招待講演）(国際学会）,2016.3.5,東北福祉大学ステーションキャンパス(宮城県）

5 井上孝之,保育実践の可視化とその質の向上,環太平洋乳幼児教育学会（招待講演）(国際学会）,2016.3.5,東北福祉大学(宮城県）

6 利根川智子,音山若穂, 三浦主博,井上孝之, 織田栄子, 上村裕樹, 保育者養成における学生の省察力育成の試み(1)-AIミニ・インタビュー-,日本教育心理学会第 57 回総会, 2015.8.28 朱鷺メッセ(新潟コンベンションセンター)（新潟県）

7 音山若穂,利根川智子,三浦主博,井上孝之, 織田栄子, 上村裕樹, 保育者養成における学生の省察力育成の試み(2)-対話後の自己評価と省察尺度との関係-, 日本教育心理学会第 57 回総会, 2015.8.28 朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター)（新潟県）

8 上村裕樹,利根川智子,三浦主博,井上孝之, 織田栄子, 音山若穂, 保育者養成における学生の省察力と批判的思考態度との関連, 日本教育心理学会第 57 回総会, 2015.8.28 朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター)（新潟県）

9 三浦主博,上村裕樹,利根川智子,音山若穂,井上孝之,現職・地域・養成の連携基盤としての対話アプローチの提案,日本保育学会第 67 回大会,2015.5.10,椙山女学園大学（愛知県）

10 井上孝之,三浦主博,放射線下における幼稚園の戸外活動再開後の課題(３),日本保育学会第 67 回大会,2015.5.10,椙山女学園大学（愛知県）

11 井上孝之,青木一則,秋田喜代美,学会大会シンポジウム,大会テーマ：子ども時代を豊かに,保育者養成におけるアクティブ・ラーニング.日本感性福祉学会第 14 回大会（招待講演）2014.12.11.東北福祉大学（宮城県）

12 井上孝之, 音山若穂,放射線下における幼稚園の戸外活動再開後の課題(２)-幼稚園児の園生活の適応から観る震災の影響-.日本教育心理学会第 56 回大会,2014.11.8.神戸国際会議場（神戸大学）（兵庫県）.

13 音山若穂,利根川智子,三浦主博,織田栄子,井上孝之,学生を対象とした保育者省察尺度の構造的妥当性の検討(2) 日本教育心理学会第 56 回大会,2014.11.8.神戸国際会議場（神戸大学）（兵庫県）.

14 井上孝之,保育士養成における授業改革について考える,提案趣旨「対話」を通した気づきと学びのコミュニケーション.平成 26 年度全国保育士養成セミナー九州ブロック大会（招待）.2014.9.18.電気ビル本館（福岡県）

15 井上孝之,柴崎正行,野本茂夫,安達譲,和田千佳,秦野悦子,菅野信夫,学会企画シンポジウム１保育臨床相談研修企画委員会企画シンポジウム,保育者が育ち合う支援体制づくり-同僚性と専門性を高めるために-.日本保育学会第 67 回大会,2014.5.17.大阪総合保育大学,大阪城南女子短期大学（大阪府）

15 井上孝之,三浦主博,大迫章史,対話型アプローチを取り入れた保育検討会の試み. 日本保育学会第 67 回大会,2014.5.17.大阪総合保育大学,大阪城南女子短期大学（大阪府）

16 音山若穂,利根川智子,三浦主博,井上孝之,対話型アプローチを取り入れた演習プログラムの一試案 -AI(Appreciative Inquiry)によるミニ・インタビュー.日本保育学会第 67 回大会,2014.5.17.大阪総合保育大学,大阪城南女子短期大学（大阪府）

17 井上孝之,村上明,放射線下における幼稚園の戸外遊び再開後の課題.日本幼少児健康教育学会,2014.3.2.淑徳大学（千葉県）

〔図書〕（計４件）

1 井上孝之,事故・災害と心的外傷への支援,近藤清美,尾崎康子,講座臨床発達心理学４社会・情動発達とその支援,ミネルヴァ書房,2017.324(226-253)

2 井上孝之,山﨑敦子編著,（株）みらい,子どもと共に育ちあうエピソード・保育者論,2016,161

3 諸富祥彦,冨田久枝編著,（株）ぎょうせい,

保育現場で使えるカウンセリング・テクニック保護者支援,先生のチームワーク編,2015,189

4 井上孝之,奥山優佳,山﨑敦子編著,（株）みらい,子どもと共に学びあう演習・保育内容総論.2014.215

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

６．研究組織
(1)研究代表者
井上 孝之(INOUE, Takayuki)
岩手県立大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：40381313

(2)研究分担者
音山 若穂(OTOYAMA, Wakaho) 群馬大学・教育学研究科・教授
研究者番号：40331300

(3)連携研究者
三浦 主博(MIURA, Kimihiro)
東北生活文化大学短期大学部・生活文化学科・教授
研究者番号：70310183

利根川 智子(TONEGAWA, Tomoko)
東北福祉大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：1002757

上村 裕樹(UEMURA, Hiroki)
帯広大谷短期大学・社会福祉科・准教授
研究者番号：90369265

織田 栄子(ODA, Eiko) 聖霊女子短期大学・生活文化科・准教授
研究者番号：00279499